

松井優征

音楽一家で育った
人気漫画家が語る

2012年から約4年間『週刊少年ジャンプ』（集英社）で連載されて大ヒットとなった漫画『暗殺教室』。同作品はテレビアニメ化、実写映画化、ゲーム化されるなど、日本にとどまらず海外でも大きな話題になりました。その作者である漫画家の松井優征先生が、漫画に対する思いや、幼い頃の思い出、ご自身の経験を通して伝えたいことなど、さまざまに語ってくださいました。

Yusei Matsui

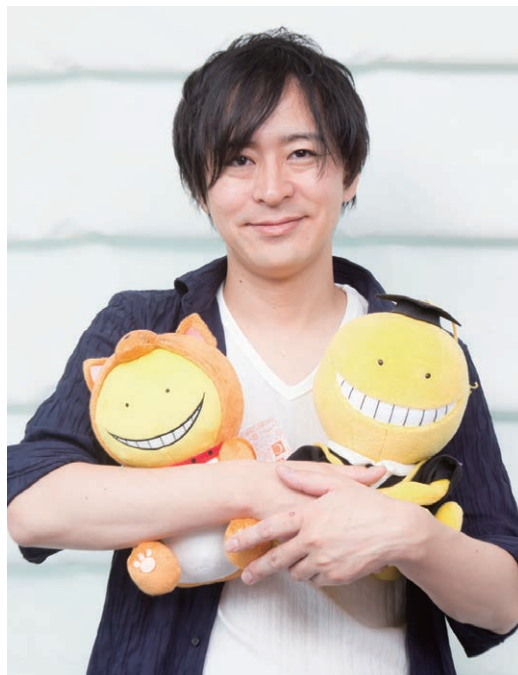
責任をもった「終わり方」

bouquet【ブーケ】編集部（以下、b）：『暗殺教室』は少し怖いタイトルに反して、読んでみると笑ってしまう場面が多く、楽しくて温かい漫画でした。進学校が舞台の物語ですが、登場人物の生徒たちのもつ背景がとても現実味を帯びている印象を受けました。取材などは行ったのでしょうか？

松井：進学校に通っていた友人たちや、集英社のかたがたの話を参考にしています。世の中には、親の求める基準が厳しく、すごく高レベルな大学に合格しても「その程度じゃ負けだ」と言われてしまうような厳しい環境にいる子たちの世界があります。僕は「きっとそこでしか味わえない挫折や喜びがあるんだろうな」と、この世界は漫画のネタになると思ったのです。

b：この作品は、連載中にテレビアニメと映画になりましたね。連載中の漫画が原作としてアニメや映画になる場合、原作とは異なった結末を迎えることがほとんどです。しかし、連載の最終回と同時期に放映された映画とテレビアニメは、原作と同じ結末でした。

松井：物語の全容は最初から決めていたので、両方の制作陣に事前に最終回までのシナリオを渡し



松井優征先生。両手に抱えるのは、ご自身の作品『暗殺教室』の主人公“殺せんせー”のぬいぐるみ

ていました。前例はほとんどない試みですが、結末が大事な作品なので、全てのメディアで同時に終わらせたいと思ったんです。何より3つのどのジャンルにおいても、結末を新鮮な状態で観ていただきたかったことが理由です。

b：連載最終回を迎えたのは2016年3月ですね。その頃、たいへんお忙しかったことと思います。睡眠時間はあったのでしょうか？

松井：『ジャンプ』での最終回の週に映画の封切りですから、1週でも遅れたら映画で先に結末をやっちゃうので、最後半年は風邪も絶対引けませんでした。連載中は毎週2日ほど徹夜しますが、そのペースであれば睡眠時間は足りています。でもいちばん忙しいとき、原稿を描いて、単行本の追加作業をして、インタビューやテレビ収録がたくさん……という週があって、そのときは地獄だったかもしれません（笑）。けれど、それも今しかできないことだと、楽しむようにしていました。

b：『暗殺教室』は180話にもわたる作品ですが、1話1話がおもしろく読めました。

松井：読むかたによっては「今回はおもしろくなかった」と思うこともあるでしょう。だけど僕としては、どの回の内容も自信をもって描いてきた

つもりです。

b：最終回が近づくにしたがって、どんどん引き込まれました。先生は単行本のメッセージで、この作品について「終わり方が最も大事な漫画」と書かれていますね。

松井：僕が子どもの頃は、漫画がとても熱かった時代ですが、最高潮のときはめっちゃめっちゃおもしろい一方で、ラストはけっこうなげやりになっちゃう作品もありました。読者のときにちょっと悲しい気持ちになったので、自分が漫画家になったら最後まで責任をもって描こうと思っていました。

b：この作品には、主人公が発する温かい言葉が多くありました。主人公は生徒たちに“社会では望んだ結果が出せないことが必ずあるけれど、悔しい気持ちはやり過してください”とアドバイスをしました。そのあとの「考えるんです 社会の激流が自分を翻弄するならば…その中で自分はどのようにやって泳いでいくべきかを」（第170話）というセリフは、とても印象に残っています。

松井：それはすごく言いたかったことです。社会に出れば、望んだ結果が出せないことは必ずあります。でも、そこで腐ってしまうと長引いてしまうんですよ。僕自身も希望した連載ができなかったという挫折がありました。けれど、気持ちを新たに描いた『暗殺教室』が世の中に受け入れられて、「切り替えたほうが早いな」と強く学んだのです。

b：主人公の言葉には、先生ご自身の思いが詰まっていたんですね。

松井：子どもの頃、中学校までは成績がよくても、高校でレベルの違いに挫折していく友人も多くいました。自分自身もそうでした。だけど、そのような考え方を一つ知っているだけで、挫折したときに前向きに生きていけると思うんです。読者のかたがこの先挫折してしまったとき、このシーンをふと思い出して、切り替えるきっかけにしてくれたらうれしいなと思います。

読み込んだからこそ得た、多くの技術

b：先生のこれまでの作品の設定や展開は、想像できないようなものばかりです。先生のお名前をインターネットで検索してみると、「天才」というワードも候補に上がってきました。

松井：天才ではありませんよ（笑）。だけど、“天才風味”でいこうかなとは思っています。お菓子の「バーベキュー味」みたいなことですね。「全然バーベキューじゃないじゃん！」っていう（笑）。ただデビューしたての頃はどんな手を使ってでも、*アンケートで1票でも多く集めたかったので、天才っぽく振る舞っていたかもしれません。読者のかたの中には、漫画のおもしろさだけではなく、漫画家の才能を愛してくださるかたがいますから。

b：小さい頃の読書体験など、現在の創作活動に影響を与えているものはありますか？

松井：子どもの頃は児童文庫が好きでした。学校中の本を読みあさっていましたが、中学生になって読む本に挿絵が少なくなると、モチベーションが下がってしまって。「挿絵が透けて見えるところまで読もう」などと読んでいたのですが、その頃から本はあまり読まなくなっちゃいましたね。それでも、高校の頃には自分の考え方を大きく変える本にも出会いました。漫画も子どもの頃はあまり買ってもらえなかったので、読んだ数は少ないです。でも、冊数は少なくとも心の中に強く刻んでおけば、その材料だけで何十年かやっていけると思うんです。1冊の漫画を、カバーがボロボロになるまで読み込んでいました。すると、その漫画の中で使われている技術が分かるようになってきます。少ないものからでも多くを得ることは可能だと思います。

b：週刊連載は大変なことだと想像しますが、漫画を描いていてつらいことはありますか？

松井：実は連載中ってもうろうとして描いているんです。トランス状態というか、半自動手記のように描いているというか……（笑）。「まあ仕事だしなあ」ぐらいでやっています。それよりも、今がつらいかもしれないですね。僕は『暗殺教室』をきちんと終わらせましたが、きちんと終わらせたということは、きちんと次を始めなければならないということです。けれども、次を描いても認められないかもしれない。次の作品に向けて考えていることが、おもしろいのだろうかという不安もあります。ずっと暗闇の中にいるような状態です。

b：デビュー作の『魔人探偵脳噛ネウロ』は4年間も連載され、テレビアニメやゲームにもなりヒットしました。『ネウロ』が終わり、次の『暗殺教室』までの期間も同じような不安はありましたか？

*毎週、『週刊少年ジャンプ』の読者を対象に実施されるアンケート。読者がおもしろかった作品3つに投票するシステム。結果は一般公開されません。



「この2つはいつも意識しています。」

「おもしろいと思ってもらふこと」「おもしろいことは何かと常に考え続けること。」

松井: ありました。“『ネウロ』の松井”とは呼ばれたくない、一発屋で終わりたいくないという恐怖がとてもありました。例えば、浦沢直樹さんの話題を出すときに“『YAWARA!』の浦沢直樹”“『MONSTER』の浦沢直樹”なんて言いませんよね。“漫画家の浦沢直樹”さんと言われています。僕は『ネウロ』と『暗殺教室』の2作品でまだまだですから、常におびえています。

b: 先生は漫画のストーリーを、どのようにつくるのでしょうか？

松井: それがね、最初のレールを敷いて、そこから走り出せば簡単なんです。「あ、これおもしろそうじゃん」というシーンを一つ思い付けば、そこにつながるストーリーを組み立てていく。『暗殺教室』では第1話2・3ページ目のシーンを最初に思い付きました。このシーンを成り立たせるためにはどうしたらよいのかと考えて、広がっていきしました。おもしろいシーンを思い付くには、ひらめきが必要です。でも、ひらめきは計算しても考えても出てくるものではありません。次の作品のひらめきが出てこない今は、苦しいところですね。

b: 息抜きになるような趣味はありますか？

松井: 食べることが大好きです。高級店も好きですけど、簡単な料理から科学を学ぶことが好きですね。家の電子レンジでどうすれば酒のつまみがおいしく作れるのかとか、冷凍したごはんはどうすればおいしく解凍できるのかとか。ジンジャーエール作りに凝ったこともあり、連載中の息抜きになりました。けれど、たまにですね。この業界は多趣味な人が多いですが、僕は時間があればぼーっとしたいです。

人には「学校」が刻まれる

b: 『週刊少年ジャンプ』の読者の多くは学校に通う子どもたちだと思いますが、ご自身の学校生活を振り返ったとき、どのようなことを考えますか？

松井: 家庭と学校は人格形成において絶対に欠かせない存在で、僕が学校から学んだことはとても多いです。子どもの頃は「学校で勉強することが将来何の役に立つんだろう？」と思っていましたが、今になってやっと、その答えが分かってきました。「勉強した内容が役に立つか立たないか」というのはあまり意味のないことで、「勉強する力」

をトレーニングしていたのだと感じます。社会人になっていろいろなスキルを身に付けるとき、学校での経験が役立つ場面がありますし、卒業した学校がステータスになるかたも多いですね。それに、人との会話で年齢の話題が出たとき「学年が一つ下ですね」「生まれ年は同じだけど、早生まれだから年上です」という言葉を聞くと、学校の気配を感じます。それだけ人には「学校」が深く刻まれているということです。今になってみれば、わずかな年齢差なんてたいしたことではないのですが、中学1年生にとっての2年生は大先輩です。

b: 現在の漫画家というご職業は、学年も年齢も関係のない世界のように感じます。

松井: そうですね。ほんとうに有り難いことで、5歳上、あるいは10歳上のかたからも敬語を使っていただくような場所で生きています。それでも当時の学校での感覚は鮮烈で、忘れられません。

b: 当時の記憶に残る学校の先生はいますか？

松井: 中学生の頃、初めて絵をほめてくださった先生ですね。今思えば下手だった絵を「うまいね」と言ってもらえて、絵を描いてみたいなと思い始めました。漫画家になろうと思ったのはちょうど中学生の頃でしたから、もしかしたらきっかけになった出来事かもしれません。あとで当時のことを先生ご本人に聞いてみたら、あたりまえですが全然覚えていらっしゃらなくて。さらにそのあと「松井は自分が育てた」と言っているらしいですけど（笑）。

b: 学校の教科では、どの教科が魅力的ですか？

松井: 歴史が好きです。歴史には、人がその場でどう動いてどう考えたかが大きく影響しますよね。裏切ったり、強いほうについたり弱いほうについたり、さまざまな野心があったり、成功したり失敗したり……。人間はずっと変わらないから、そのような繰り返しが続いています。将来の生き方にも活かせるジャンルでしょう。

b: 歴史は得意だったのでしょうか？

松井: よい成績はとれていました。でも漢字が苦手だったので、漢字を間違えて減点されることもありました（笑）。それから、漫画で描かれている

「日本の歴史」。あれを読んでおくと歴史の知識が底上げされるので、絶対におすすめしたいです。最近、漫画で学ぶ本や参考書がたくさん出ています。

b: 『暗殺教室』のキャラクターたちと学ぶ参考書シリーズ、『殺たん』『殺すう』（集英社）もありますね。例えば『暗殺教室』に登場する生徒たちは山の上の校舎に通っていますが、「僕らの学校は山の上に建っている」という英語の例文が出てくるなど、ストーリーが絡んでいます。

松井: この参考書シリーズを通して、ストーリーの力、キャラクターの力、それらはすごく大きなと、あらためて感じました。漫画というものは、すごい威力がありますね。

音楽一家に生まれて

b: 先生のこれまでの作品には、音楽に精通したキャラクターが登場します。先生ご自身は、音楽の経験はありますか？

松井: 僕はクラシック音楽をする家庭で育ちました。父は音楽大学で教えていましたし、上の兄弟二人も音楽家です。僕自身も幼少期はヴァイオリンとピアノをやらされていました。

b: 音楽一家だったのですね。

松井: はい。幼い頃から上2人が音楽を習っているのを見てきましたが、とても大変そうでした。だから音楽は「厳しいもの」というイメージがあります。末っ子の僕まではあまり手が回らず、小学校高学年で解放してもらえましたけれど（笑）。家族の誕生日など特別な日には、家族全員で歌うことが自然であり、そういうときは音楽を楽しんでいたと思います。僕が教えられたのは初歩の初歩までですが、そのおかげでカラオケですぐハモれたり、キーをCにすれば大体のメロディーは鍵盤で弾けたり。稚拙ですが「音を楽しむ」という意味では十分役に立っています。

b: 漫画家の道に進むことを決めたとき、ご家族の反応はどうでしたか？

松井: 「漫画家になりたい」と言ったら「ああ、いいよ」と全く抵抗のない様子でした。もしも公務員の家系だったら、漫画家になることを許してもらえ

なかったかもしれません。そのときほど音楽一家に生まれてよかったと思ったことはないですね。

b: 先生から見ても、クラシック音楽の世界はどのようなものでしょうか？

松井: 現在、どの業界においてもプレイヤーが増えてユーザーが減っている状態だと感じます。漫画の世界でも、趣味で漫画を描くけれど買わない人が増えているんです。でもそういう人も、手軽に描いてネットや同人誌で公開して楽しんだり小遣いを稼げる環境があります。クラシック音楽も奏者が多くて客が少なくなる傾向は多分似ていると思いますが、身に付けた技術をどう使うかが漫画と少し違う気がします。演奏を仕事にするのは難しいからと、人に技術を教えるしか選択肢が無いかたが多いように感じます。すると「習って教える」という連鎖だけになり、「楽しむ機会」はちゃんとあるのだろうかと思ってしまう事があります。素人の僕が何か言ってよいのであれば、身に付けた技術を、ぜひご自身で楽しむために使っていただきたいです。気の遠くなるような時間とお金と努力で、すばらしく深い技術を身に付けられているのですから。

お客様ファースト

b: 漫画を描かれているうえでいちばん大切にされていることは何ですか？

松井: 「お客様ファースト」です。「社会人としてお金をいただいて漫画を描いている以上は、お客様である読者が喜ぶことが全てである。自分の描きたいことは二の次である」ということが僕の哲学です。その中に少しだけ、こっそりと自分のやりたいことを挟み込めるぐらいでいいと思っています。「おもしろいと思ってもらうこと」「おもしろいことは何かと常に考え続けること」。この2つはいつも意識しています。

b: 読み手の気持ちを大切にしているのですね。

松井: 僕は10代後半から漫画を描いてきました。最初の頃はおもしろいかどうかは一応考えていましたが、まずは自分が描きたいものを描いて「これがおもしろくて当然だ」という気持ちがありました。しかしプロになり社会人という立場になると、さまざまな場面で「歩み寄り」が大切だと感じ

たんです。なるべく多くの人に届くような努力をして、このスタンスを変えることなく、次の作品も描いていけたらなと思っています。

b: 先生の漫画の読者は子どもたちが中心ですが、今の子どもたちにどのようなことを伝えたいですか？

松井: 「興味のない勉強があったとしたら“競技”だと思ってやるといいよ」と伝えたいですね。とにかく詰め込むことを楽しんでほしいと思います。頭に詰め込むトレーニングは絶対に将来役立つはずですし、実際にその“詰め込む能力”を大学までは問われている。だけど諦めてしまう人はすごく多いし、自分も高校の頃はそうでした。でも、もっとおもしろい楽しみ方があったらこうなと思うし、楽しめる勉強法を見つけたなら、身にならなくても無駄にはならないと思います。大人になると詰め込んだ内容のほとんどを忘れてしまうかもしれませんが、1割か2割は残ります。どれだけ効率的に詰め込んだかというトレーニング法、競争に勝ったときの喜び。そういうことは今のうちに絶対学んだほうがいいはずですよ。

松井優征 (まつい・ゆうせい)

漫画家。埼玉県出身。

デビュー作は『魔人探偵脳噛ネウロ』。同作品は2004年「第12回ジャンプ十二傑新人漫画賞」準入選ののち、05年～09年に連載された(週刊少年ジャンプ掲載)。12年～16年『暗殺教室』(週刊少年ジャンプ)連載。読切作品に、09年『離婚調停』(ジャンプSQ掲載)、11年『東京デパート戦争体験記』(少年ジャンプNEXT!掲載)がある(集英社/全て)。

上野耕平の

crossing [クロッシング]

複雑に絡み合う鉄路。圧巻の景色に心奪われる近鉄大和西大寺駅。
近鉄橿原線、奈良線、京都線、そして隣接する車両基地からの線路が平面で交差するという“線路マニア”の聖地。その複雑なポイントが奏でる変拍子なジョイント音は正に鉄道版現代音楽。
撮影は昨年冬。ひっきりなしに各方面から飛び込んでくる列車を寒いホームで2時間鑑賞、風邪をひく……。でも、寒さを忘れるほど楽しめる場所なのだ！



第2回

奈良県近鉄大和西大寺駅
やまと さいだいじ

文・写真：上野耕平 (うえの・こうへい)

第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サクソ国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

上野耕平を中心としたサクソ・カルテット「The Rev Saxophone Quartet (ザ・レヴ・サクソフォン・カルテット)」によるCD『Fun!』(日本コロムビア) [2,500円+税/COCQ-85442] が2018年11月28日に発売。
〈収録曲〉稲森安太己『ふるさと狂詩曲』、ビゼー(萩森英明編)『カルメンファンタジー』、J.S.バッハ『G線上のアリア』他

編集部メモ

奈良県最大のターミナル駅、大和西大寺駅には、平面で交差する線路を見下ろすことのできる展望デッキが備わっています。

行き方

- ◇大阪駅から
JR大阪環状線(京橋方面)で鶴橋駅まで約16分。
そこで近鉄奈良線急行(近鉄奈良行)に乗り換え、約26分で大和西大寺駅着。
- ◇京都駅から
近鉄京都線急行(近鉄奈良行/天理行/橿原神宮前行)約44分で大和西大寺駅着。



日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えているかたがたを取材します。

第3回は、富山県高岡市、鑄物^{もの}メーカー「能作」の本社工場を訪ね、産業観光部部長・広報担当の能作千春さんにお話を伺いました。



能作千春（のうさく・ちはる）

富山県高岡市出身。能作家の長女として生まれ、2010年、家業である鑄物製造業の道に進む。2015年から産業観光を担うチームのリーダーとして奮闘中。二児の母でもある。

第3回 富山県 高岡市

能作千春 能作（鑄物製造業）

「高岡銅器」で有名な富山県高岡市は、鑄物を中心に商工業の地として発展してきました。遡ること400余年、二代目加賀藩主の前田利長が、まちの発展を願って、大阪から7人の鑄物師^{もいし}を呼び寄せたのが始まりといわれます。

爽やかな青空が広がる夏の午後、のどかな田園風景の一角に建つ「能作」の本社工場を訪ねました。ここには、「高岡銅器」の伝統を受け継ぎながら、新たな素材やデザインの鑄物に挑戦する、若い職人たちの心意気があふれていました。

銅器のまち、高岡に生まれて

——千春さんは、ずっと鑄物産業に携わっていらっしやるのですか？

「私は今の四代目社長の長女として誕生したのですが、神戸の大学に行き、そのままアパレル誌の編集者として3年間勤務していました」

——戻ってくるきっかけが何かあったのですか？

「通販カタログを作っていたある日、あこがれだった職場の先輩が、『これ、すごくおしゃれじゃない？注目だね』と言って何やら持ってきたのです。見れば、なんとそれは

能作の器でした。その先輩はもちろん私が能作の娘だとは知らずに。そのとき、『故郷で父親が企画した製品が神戸にまで出ている』ということに感動したんです」

——まさに運命的な巡り合わせですね。

「その出来事があってから、周りにも積極的に能作のことを紹介するようになって。退職するときには『地元に戻ったほうがいいわよ』と背中を押してもらったような感じでした」

——ここ高岡市は「銅器のまち」として有名ですね。

「能作は創業102年ですが、高岡銅器は約400年の歴史があります。鍋や鋳^{くわ}といった生活用品から、徐々に美術工芸品である仏具や茶道具、花器へと進化していききました。そのため、銅器の生産額は日本一。けれども年々需要が減っており、跡継ぎがいなくて廃業するところも……」

——職人は熟練するまでに時間がかかると聞きます。

「うちは特殊で、職人の平均年齢は32歳、世代別には20代が多いんです。錫^{すず}という金属で製品を作り始めたのも2004年で、まだ十数年しかたっていません。昔からの技術を応用してはいるのですが、技術改革を重ね、若くても職人として働けるようにしています。父が入社した1984年当時の職人数は7人でしたが、今は60人います」

——若い世代が多いと、どのような雰囲気になりますか？

「活気がある分、いろいろな意見のぶつかり合いもあります。例えば『ただ物を作るだけでなく意味合いをもった

仕事をしたい』『生産効率を上げたい』といった意見交換も活発です」

——いろいろな職人がいらっしやると思いますが、どのような工程があるのでしょうか？

『生型鑄造』という、砂で型を作る技法を用いるので、大きく分けて、型を一つ一つ手作りし金属を流し込む鑄造の工程（鑄物場）【写真①】と、それを加工する工程（仕上げ場）【写真②】の2つがあります」

——素材は錫がメインですか？

「真鍮^{しんちゅう}と錫、大きく2つの金属を扱っています。真鍮は創業当時から扱っている銅と亜鉛の合金で、色は金色をしています。音色が美しく、風鈴などに用いられます。錫は銀色で、主に食器に使われます。柔らかい素材特性を生かして錫100パーセントの製品にチャレンジしたのは日本で初めてといわれています」

教育と結び付いた産業観光

——昨年4月に、今の新しい社屋【写真③】へ移転したと伺いました。

「移転の第一の目的は、製造から出荷までを一つ屋根の下で行うことで生産効率を上げたいということ。第二の目的は、産業観光に力を入れていきたいということです。それらを達成するには広い敷地が必要で、ここは約4千坪あります」

——鑄物メーカーが観光の役割を担うというのは斬新です。

「きっかけは父が入社した当時に遡ります。ある日、小学校高学年の男の子とその親御さんが工場見学に来られました。旧社屋の手狭な工場でしたが、父は意気込んで『ぜひ見てください』と言って案内しました。現場を見せているときに親御さんが放った一言というのが『よく見ておきなさい。ちゃんと勉強しないとこんな仕事をする事になるよ』。父は大きなショックを受けました。その出来事が、

『地元の産業のよさを知ってもらいたい』という、産業観光に力を入れることになった原点です。今、高岡市では『ものづくりデザイン科』という授業が小学校5・6年生、中学校1年生で行われています」

——公立の学校全てで行われているのですか？

「はい。高岡市の産業に親しむことが目的で、毎年2千人以上の子どもたちが能作の工場を見学しに来てくれます【写真④】。その子どもたちからもらった手紙には『職人かっこいいね』『ものづくりってすごい』といった言葉が書かれていて、職人の休憩室に貼って励みにしています。実は、職人の中には小学生のときに工場見学に来たという人もいます」

——教育と地元の産業が結び付いたすばらしい例ですね。

「産業観光でいちばん大事にしているのは、子どもたちにその地域の産業を知ってもらい、誇りをもってもらうことです。『鑄物を学ぼう』という小学生限定の夏休みの企画は、穴埋め式「能作ドリル」で勉強しながら工場見学と鑄物製作体験を兼ね、職人と触れ合えて、お土産まで付きます。私自身も3歳と5歳の子どもがいるので、『小さい子でも楽しめるもの』という視点を意識しています」

——最後に、館内で流れている不思議な音楽は何ですか？

「smoo（スマウグ）というバンドの演奏です。移転するときに『思い出を音に残したい』と思い、旧社屋の音、例えば砂の落ちる音や職人の奏でるスコップの音、そういった独特な音色を録音して、バンドとコラボレーションした音楽をつくってもらいました」

——まさにサウンドスケープですね。

「夜の社屋でライブを行ったことがあるのですが、工場の照明とうまくマッチしてすてきでした。音楽とのコラボレーションをはじめ、いろいろな可能性に挑戦していきたいです」

能作 本社

〔営業時間10時～18時 工場見学・鑄物製作体験は事前予約制／休業日 年末年始〕
富山県高岡市オフィスパーク8-1／TEL 07666630001（見学・体験等問合せ）／FAX 07666635510



【写真④】工場見学の様子。奥で説明をしているのが千春さん



【写真③】昨年完成した新社屋。屋根の赤色は金属を溶かす炎の色を表す。製品が作られる工場に、カフェやショップが併設されている。今年4月には来場者数10万人を達成（©車田保）



（上）四季折々の花をかたどった小皿
（右）柔らかい錫素材で作られた自在に曲がるカゴ
（左）ゆらゆらと揺れるカップ



【写真②】ろくろを使って一つ一つ磨き上げる



【写真①】木型の周りに砂を突き固め、木型を抜き取ることで鑄型ができる



製品の形状を決める木型。製造元によって色分けされている

One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

写真家。日本舞台写真家協会会員。
東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。
<http://hidaki.weebly.com>

4 枚目

ダンサーの熱

「おっと」舞台裏の暗がり誰かに押され、ダンサーの一人にぶつかると、彼の汗の湿度と熱気がじかに腕に伝わってくる。ごめんねとジェスチャーすると、大丈夫？と笑いかけてくれた。スリランカの古都キャンディで、最後の演目待つ男性ダンサーたちの美しさに心が躍る。ステージ上の輝き以上に、バックステージでの何気ない姿に心が奪われるのは、舞台の輝き

をつくり出す人間そのものに惹かれるからだろうか。
人が生き、何かを願い、踊り、あつという間の一生。国は違っても、人として生きる大変さと幸せは、そう大きく違わない。その中の何気ない一瞬を共有することが、なんだかとても、素敵なことに見えるのだ。





本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに伝えた講話や文章をご紹介します。

前号に続いて第4回も木村七郎先生のお話です。今回ご紹介するのは、札幌市立厚別中学校で校長を務めていたとき、合唱コンクールを終えた生徒たちに届けたもの。学校外の活動として千歳吹奏楽団の指揮者を務めていた木村先生が、少年院で訪問演奏したときの体験です。

木村七郎（きむら・しちろう）
酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校特別職
千歳吹奏楽団指揮者
日本国際飢餓対策機構 ハンガーゼロ・アンバサダー
日本国際飢餓対策機構 ハンガーゼロ・北海道連絡所長

第4回 木村七郎 先生（札幌市立厚別中学校 第8代校長）

少年院への訪問演奏

私が大学を出て新任教師として赴任したのは北海道の空の玄関口、千歳市にある千歳中学校でした。

当時私は、中学校では合唱部を指導し、休日だけ吹奏楽部の副顧問として金管楽器の指導をしていました。学校外では、地元の千歳吹奏楽団の指揮者を務めていました。

千歳吹奏楽団は、定期演奏会や商店街での演奏の他、社会福祉施設や少年院への訪問を大きな活動の柱としていました。

北海少年院への訪問は毎年3月末に行われましたが、訪問前にはポップスなどの曲に加え、『北海少年院歌』『オアシスの歌』の伴奏を入念に練習しました。

訪問演奏当日、私たちは、正面玄関に続く長い渡り廊下を歩いて会場へと向かいます。まず廊下に入るドアが開錠されます。そしてすぐに施錠されます。さらに幾度も開錠と施錠が繰り返され、ようやく演奏会場である食堂に到着します。

厳重な施錠。年に一度の訪問で慣れているとはいえ、この非日常の出来事に、私たちは毎度緊張したものでした。

わずかのリハーサルのと、いつものように院生が隊列を作って入場し、早速本番です。

院生たちの、耳鳴りがするほど大きな「こんにちは」のあいさつのと、『北海少年院歌』を歌います。ポケット歌集を持った右手はまっすぐ前に伸ばし、左手は背骨の所まで回す。背筋を伸ばして立つ姿は皆一緒です。吹奏楽が消されてしまいそうなほどの大きな歌声で、食堂中がゴーッとうなりを上げています。



千歳吹奏楽団（1975年に設立）。同楽団は千歳市の文化・教育に貢献することを目的に活動しており、今は木村七郎先生が指揮者を務めている

続いて『オアシスの歌』です。

オアシスのオは「おはよう」のオ
オアシスのアは「ありがとう」のア
オアシスのシは「失礼します」のシ
オアシスのスは「すみません」のス

この歌声に涙腺を緩めながら演奏している女性団員もいます。

また、恒例となっている「指揮者コーナー」では、3人の院生がポップスやアニメ主題歌の指揮をしましたが、なかでも中学生と思われる小柄で柔和な感じの院生は、とてもすばらしい指揮をしました。きっと学校では音楽が得意だったのでしょう。もしかしたら合唱コンクールなどで学級の指揮者をやったことがあるのかもしれない。

「なぜ、この子はここに？」「いったいこの子に何が？」

この少年たちは、いったいどこでどう道を間違えたのでしょうか。

地鳴りのようなすごい歌声は、いわゆる「矯正教育」の一環だと思います。それにしても、こんなにすばらしい声で歌うことができるのです。

「どうか立派に社会復帰してほしい」と願わざるをえませんでした。

【厚別中学校生徒の皆さん】

今日の、皆さんの立派な歌声、立派な演奏マナーを見ると、そのときのことを思い出しました。また、あの立派に指揮をした少年の姿を思い出しました。

皆さんには、どうかこれから、道に迷っても決して道を間違えないで生きてほしい。そして立派な大人になってほしいと願うのです。

(平成 22 年 10 月 合唱コンクール後
札幌市立厚別中学校 学校ホームページの校長ブログ「レインボートビックス」より)



千歳吹奏楽団は現在、千歳市民文化センター（北ガス文化ホール）で練習を行っている。このホールは黒澤明監督の映画『乱』の音楽を録音した場所でもある。写真は大ホールで、木村七郎先生（最前列中央）とメンバーたち。平成 30 年 5 月 20 日、第 40 回記念定期演奏会より

【千歳吹奏楽団との邂逅】

新卒 6 年間で千歳市で過ごしたあと、私は札幌市に転勤し、定年退職まで札幌市内の市立中学校で勤務しました。千歳吹奏楽団や千歳の教え子とは、もう会うこともないだろうと思っていましたが、退職後 2 年目に千歳吹奏楽団から連絡があり、何と 35 年ぶりで指揮をすることとなり、現在に至っています。

平成 30 年 7 月豪雨、台風 21 号、

北海道胆振東部地震、

台風 24 号などにより、

日本各地に甚大な被害が発生しました。

お亡くなりになられたかたがたの

ご冥福をお祈りいたしますとともに、

被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

被災地の一日も早い復旧を

心よりお祈りいたします。



[ワールドレポート]

World Report

子どもたちに学校を シリア難民キャンプの音楽教育（後編）



Haruko Matsunaga

松永晴子さん

高校の美術教員を経て、日本人学校の教員としてベトナムに赴任。その後、青年海外協力隊としてヨルダンへ渡り、他支援団体での勤務を経て、現在はKnK駐在員としてシリア難民の子どもたちへの教育支援に携わる。

ヨルダンにあるザアタリ難民キャンプでは、隣国シリアから逃れてきた約8万人の人々が避難生活を送っています。前号のレポートでは、「NPO法人 国境なき子どもたち（以下KnK）※」の駐在員としてこのキャンプで活動されている松永晴子さんに、ヨルダンへ渡ったきっかけやKnKによる教育支援について紹介していただきました。

今回はその後編として、キャンプで行われている音楽の授業や子どもたちの様子について、松永さんの温かい目線で書かれたレポートをお届けします。

※1997年に日本で設立され、これまで15カ国（地域）において8万人以上の子どもたちに教育機会を提供し、自立を支援している。

シリア・アラブ共和国
Syrian Arab Republic

ヨルダン・ハシェミット王国
Hashemite Kingdom of Jordan



子どもたちの歌声

学校の敷地内から子どもたちの歌声やピアノ伴奏の音が聞こえてくると、どこかうれしい気持ちになるのは、日本でも難民キャンプでも変わりありません。教室にピアノはありませんが、キーボードをピアノの音に設定し、同時にリズムも流しながら旋律を弾くのが、よくあるこちらの伴奏スタイルです。軽快なリズムと旋律の音にのせて子どもたちの歌う声が聞こえてくると、隣の教室の子どもたちまでつつい自然と身体を揺らしてしまうのが窓越しに見えることもあります。

歌の授業では、まず歌詞を勉強します。アラビア語は、日常的に使われるアンミーアという口語と、文章やテレビのニュースなどで用いられる正則アラビア語に分かれています。歌の多くは正則アラビア語で書かれています。そのため、歌詞を黒板に書いて、それを読み上げながら新しい単語を学んだり、韻を踏んだ歌詞のリズムを楽しんだりします。また、少し難しい文法を正しく理解する学習にも歌詞が役立ちます。

今のところ、音程をきちんと取って歌うことは難しいのが現実で、歌詞を口にするだけで精一杯という子も少なくないようです。私も実際に歌ってみて分かったのですが、歌詞をぎっしりと詰め込んだタイプの曲が多いため、歌いこなすのは簡単ではありません。日本の歌でいうと、吉田拓郎さんの『春だったね』や井上陽水さんの『氷の世界』といったイメージでしょうか。けれども、こちらの子どもたちは、音が取れず明らかに旋律から外れていても、それほど恥ずかしがる様子はありません。それは見ていて晴れ晴れしいほどで、周りの目を気にせず、元気よくうれしそうに、のびのびと歌ってくれます。今はまだ発声や音階の練習までなかなか手が回りませんが、現在の授業内容がもう少し定着してきたら、新たな挑戦として音程を正しく取れるようになる訓練も取り入れていきたいと考えています。

音楽のアラー先生

アラー先生は、女子のクラスで音楽を教えています。ふっくらとした顔立ちの、とろけそうに優しい目が印象的な先生は3児の母で、今4人目の子がおなかの中にいます。2015年からKnKの教員として働き始めました。少しおなかが大きくなってきていますが、大きなキーボードをいつも自分で持って授業に向かいます。私が手伝おうとしても手伝わせないのです。楽しくてつい調子にのりがちな子どもたちを、ときにはしっかりと叱りながら、でもぱっと気分を変えて楽しい授業に戻る、そんなメリハリのある先生です。

先生自身も難民で、かつてシリアにいたときにカレッジで音楽を学びました。日本のセンター入試と同じような制度がシリアにもあり、その結果で選んだのが音楽カレッジでしたが、実は宗教の先生になりました。家族の励ましもあって音楽カレッジに通い続けるうちに、どんどん音楽の楽しさが分かってきたという話を聞きました。

ほんとはアコーディオンが大好きなのですが、キャンプのアコーディオンは壊れているため、今はキーボードで歌の伴奏を弾いています。もともとアラー先生がキーボードで弾ける曲はあまり多くありませんでした。そこで、以前JICAの青年海外協力隊で音楽教員としてアラブ圏に派遣されたかたたちが作成した楽譜集を渡して練習してもらっています。

シリア人のアラー先生は、子どもたちと同様、キャンプの中で生活しており、長期休みには、プレハブの自分の家にキーボードを持ち帰って練習しています。自宅での練習を見に行ったことはありませんが、3人の子どもたちもお母さんの弾くキーボードの音色を楽しんでいることでしょう。

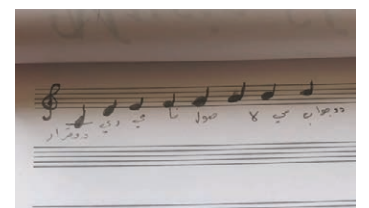
※シリアやヨルダンでは、宗教の授業が小学校1年生からある。

ソルフェージュを大切に

授業では、音階の練習をするときなどに「ソルフェージュ」という言葉を必ず使います。シリアは過去にフランスの委任統治領だった時代があり、音楽教育の基礎もフランスから来ています。シリア出身のアラー先生にも、フランス語の名称はなじみ深いようです。

子どもたちの心理的ケアだけを目的とするのであれば、歌を歌ったり、楽器を演奏したりするだけでも十分だと思われるかもしれませんが、既にキャンプが開設されてから6年以上たち、普通の暮らしに戻りつつある中、子どもたちも本来の教育を受けるべき段階にきています。そのため、音楽教育の基礎であるソルフェージュを教えることは、これからの授業を発展させていくうえで必要だと考えています。

初めて「ドレミ」という発音や音階の仕組みに触れたとき、とまどいを感じる子どもも多く見受けられましたが、今ではすっかり慣れて、黒板に書かれた譜面を見ながら歌えるようになってきました。



アラビア語の「ドレミファソラシド」

なぜ音楽の授業が必要？

ザアタリ難民キャンプでの教育支援が始まったのは2013年ですが、KnKは2007年からヨルダンでイラク難民支援事業や若者を対象とした支援活動を行っており、その軸には常に、音楽を含む情操教育がありました。今、キャンプでは「作文」「演劇」、そして「音楽」の授業をしています。この3教科はいずれも、心や身体の内面にあるものを表出させることを可能にします。特に「音楽」は、子どもたちの感性を豊かにし、歌、楽器、楽理などさまざまな手段で学びを深めることができる教科なので、情操教育には欠かせません。どちらかというと人と合わせるよりは自分の主張を出しがちな子どもたちが、合唱や合奏などの活動を通して、誰かと一緒に美しいものを創り出す楽しさを感じる機会となれば、うれしい限りです。

また、何より単純な理由として、アラブ圏の人々の多くは音楽が大好きだということも挙げられます。皆、ノリがよくて踊り出したくなるような音楽を特に好んで聴きます。そうした民族性もあり、子どもたちにとっては、音楽の授業そのものが普通の授業とは全く違った、楽しい時間となっているようです。

子どもたちの変化

日本のように音楽室がないので、音楽の授業をするときには、先生がキーボードを持って教室まで出向きます。教室の窓から先生の姿を見つけると、それまで騒がしかった子どもたちが自分の席に戻ってきます。皆、授業を楽しみにしているのと同時に、授業を受ける態度も身に付いてきたことが分かります。音楽は楽しい授業ですが、「楽しい」という気持ちのほうが勝ってしまい、先生の話になかなか集中できなかったり、はしゃいでしまったりする子どもたちも以前は少なくありませんでした。それでは授業が成り立たないので、「ルールを守って、もっと授業を楽しむ」という考え方を定着させようと、先生たちは授業中のマナーをしっかりと教えています。

また、ソルフェージュを始めてから、譜面を正確に読める子どもが増え、鍵盤ハーモニカも上手に演奏できるようになってきました。主要教科ではよい成績が取れないけれど、歌をとってもきれいに歌える子どももいます。今までほめてもらえる機会が少なかった子どもたちにとって、音楽は特別な存在です。音楽の授業が、学校に来るための大事なきっかけにもなっています。最近、家に帰ってから音符の書き方の練習をしたり、鍵盤の形を印刷した紙の上で運指の練習をしたりする子どもたちも出てきました。



鍵盤ハーモニカが大人気

自分でずらずらと譜面を読み、正確な音で歌えるようになるにはまだまだ練習が必要ですが、音楽の授業が、ただ好きな歌を歌える楽しい時間から、ソルフェージュを勉強し歌のレパートリーを増やしていく時間、鍵盤ハーモニカの演奏を上達させるための時間へと変化してきています。子どもたちが以前にも増して音を楽しむことに心を開き、積極的に取り組んでいる様子を見ることができるのは、教員やスタッフにとってもうれしい変化です。身近にあるいろいろな音楽や音そのものを楽しむ方法を、1つでも多く体感したり経験したりしてほしいと思っています。

(文: 松永晴子 / 写真: 国境なき子どもたち)



紹介ページ

https://www.kyogei.co.jp/data_room/bouquet/no3_wr.html

キャンプで行われている音楽の授業の動画をご覧ください。

文中の地名は筆者の表記にそらえています。



タイトルロゴ: 石野善加 (DAI-ART PLANNING)